

## アントニーの思い出

レオナルドとアントニーは幼い頃からの友達で、一人は絵を描くことが大好きだった。一人とも、画家として活躍する機会を見ていた。

やがて、一人は有名な絵画の学校に入学した。大好きな絵を勉強するために一生懸命に働いて学費をはらって、わずかに残ったお金を出し合って小さなアトリエを作った。そのアトリエで夢中に絵をかいたり、将来の夢やおたがいの絵について熱心に語り合ったりした。アントニーの時間は、二人にとって大切なかけがえのないものであった。

学校を卒業してすぐ、レオナルドに大きなチャンスがおとされた。かれの庭にした絵が、大きなコンクールで大賞を取ったのである。レオナルドは、真っ先にアントニーに伝えた。アントニーはとても喜んだ。

「レオナルド、すごいじゃないか。君は、ほくの白さんの友達だよ。このチャンスを大切にすみるだぞ。」

大賞をとったレオナルドは、まだたゞ間に絵を画家となつた。かれの絵は高値で売れ、生活は一変した。じつにこんな人たとの付き合いが増えたければ、いつしかアントニーと会うこともなくなつてこうつた。

レオナルドの活やくを心から喜んでいたアントニーは、それでよこと思つた。

十年後、レオナルドは有名なコンクールのしん査員となつてついた。

「今年の絵は、どれもすばらしいです。」

審査員たちは口ぐさにやう言ひ、應ほされた絵のレベルの高さに感心してついた。多くの絵の中で、最終選考に二つの作品が残つた。レオナルドは、この最終選考のしん査員を任せついた。どちらもすばれた作品ではあつたが、きれいな色づかいで独創性に富んだ絵に、レオナルドは心をひかれた。  
(「こんなにすばらしい絵は見たことがない。この絵を大賞にえりませう。」)

大賞にえりめく絵を決めたうえで、今一度、せり一方の絵に目をやつたレオナルドは、はつとつた。絵のすみに小さく書かれていたので分かつてはかつたが、よく見ねると、それは見えあるサインだった。

(アントニーの絵だ!)

なつかしさサインを目にして、レオナルドの心は大きく揺れた。会わなくなつても、アントニーのことをずっと気にかけていたレオナルド。かれには冷静なしん査はできなかつた。すばらしいと思つ絵を選ぶのか、それとも、友達のアントニーの絵をえりむのか…。

迷いに迷ったすば、レオナルドは心を決めてアントニーの絵に票を入れた。接戦であった最終選考で、レオナルドの票が明暗を分けた。アントニーの絵が大賞をとったのである。

アントニーの大賞を自分のじつのように喜んだレオナルドは、その夜、応用紙からアントニーの連絡先を知り、興奮気味に電話をした。

「よべいじが分かったね。君から電話をかけてくれるなんていれしけな。」

アントニーは、なつかしい友達の声にとても喜んだ。

「君の絵がコンクールで大賞をとったことを、一刻も早く伝えたくてね。」

「それは本当に。しかし、なぜ君がそのことを知っているんだい。」

「実は、あのコンクールのしん査にたまたまわっていたんだよ。あれは君の絵だと、サインを見て分かった。今回はずばりしげ絵がたゞわんあつて、ほくも迷ったよ。でも、友達の力になれて本当によかった。」

その話しぶりから、アントニーには、しん査時のレオナルドの心の中が容易に想像できた。しばりのちんもぐの後、「

「やつだったのか…。」

やつ語りと、アントニーは力なく取説器を置いた。じせし、ぼつ然と立つてゐたアントニー。

かれの田から一筋のなみだがあつと流れ落た。

電話がきたあとによつやべ、レオナルドはアントニーの気持ちに気が付いたのだった。

数日後の授賞式に、アントニーの姿はなかつた。レオナルドは、かぞりれていた大賞の絵を複雑な氣持つで見つめていた。アントニーの絵の題名は「アートの壁」だった。